

けんぱくものしりシート

じょ がく せい しょう ぞく

女学生装束

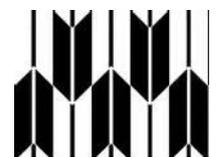


これは、明治時代（1868年～1912年）の終わりごろから大正時代（1912年～1926年）の初めごろにかけて、全国の女学生が着ていた着物と袴を参考にして作ったものです。「女学生」とは、おもに、1891年ごろから1947年まで、12歳から17歳くらいの女子が通っていた「高等女学校」の生徒のことです。そのころ、高等女学校に通うことができるのは、勉強がとてもよくできて、家が裕福な、ごくかぎられた人だけでしたので、女学生たちは自信にあふれた表情でこの衣装を身につけていたことでしょう。



大正10年の女学生

昔はおとなしくしていることがよいとされていた女性も、明治時代には、活動的に体を動かすほうがよいと考えられるようになりました。女子の制服にも動きやすさが求められ、着物のすそを気にせずに動くことができる袴をはくことになったのです。女学生用の袴は、男性用の袴のようなパンツ型ではなくスカート型に仕立てられ（行灯袴）、動きやすく、着ている姿が美しいことから、またたく間に全国に広まっていきました。合わせる着物はおもに綿素材で、それぞれに好きな色や柄の着物を着ていましたが、矢継（→）などが人気の柄だったようです。袴の色は、はじめに海老茶（紫がかった暗い赤色）が流行し、その後、紫色やオリーブ色がはまりました。



髪型は、頭^{あたま}のてっぺん^{てっぺん}にふたつ^{ふたつ}の輪^わをつくり、髪^{かみ}の先^{さき}をまきつけた「稚児髷^{ちごまげ}」(下の絵の髪型^{かみがた})や、西洋風^{せいようふう}の結び方^{ゆい}を日本人^{にほんじん}に合うように工夫^{くふう}した「束髪^{そくはつ}」(①)、束髪^{そくはつ}の後の部分^{うしろぶぶん}をほどいた「束髪くずし^{そくはつくずし}」(②)などがありました。岩手県内^{いわてけんない}では、これらのほかに、「桃割^{ももわり}」(③)「三つ組みおさげ^{みつぐみおさげ}」(④)なども結われていたようです。

胸^{むね}や、袴^{はかま}の中央^{ちゆうおう}などに、バッジ型^{がた}やベルト型^{がた}の徽章^き章^{しょう}(学校^{がっこう}のシンボルマーク)をつけていました。

着物^{きもの}の袖^{そで}は、始め^{はし}の頃^{ころ}はふつう^{かたち}の形^{かたち}でしたが、大正時代^{たいしょうじだい}には、動き^{うご}やすい「筒袖^{つつそで}」の着物^{きもの}を着ていたようです。

袴^{はかま}の色^{いろ}を決^きめている学校^{がっこう}も

ありました。

岩手県^{いわてけん}では、

●県立盛岡高等女学校(今の盛岡第二高等学校)

→れんが色

●東北高等女学校(今の白百合学園高等学校)

→紫色

などの例^{れい}がありました。

革靴^{かわくつ}やブーツ^{ブーツ}をはく女学生^{じょがくせい}もいま

ですが、岩手^{いわて}では、白足袋^{しろたび}にふつうの^ひ下駄^{げた}や日和下駄^{ひよりげた}(雨以外^{あめいがい}の日^ひにはく、^{ひく}低い歯^いを入^いれた下駄^{げた})をはいている女学生^{じょがくせい}が見^みられたよう^{こうない}です。校内^{がくせい}のうわばきは、白^{しろ}いはなのおの麻裏^{まうら}ぞうり(ぞうりの裏^{うら}に、麻糸^{あさいと}を平^{ひら}たく編^あんだひもをとじつけたもの)でした。



女学生スタイルは今^{いま}でも人気があり、大学生^{だいがくせい}の卒業式^{そつぎょうしき}などで着^きられています。みなさんもぜひ、体験学^{たいけんがく}習^{しゅう}室^{しつ}で、女学生気分^{じょがくせいきぶん}を味^{あじ}わってみてくださいね。

参考^{さんこう} 『近代日本学校制服図録』創元社 2016年 / 『岩手近代教育史』岩手県教育委員会 1981年 / 『女学生手帖』大正・昭和乙女らいふ』河出書房新社 2005年 他

らいげつ がつ
来月(1月)の
けんぱくものしりシートは
ちしつ
地質-14だよ!
おたのしみに!



モッチャン



岩手県立博物館

〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34
Tel. 019-661-2831 Fax. 019-665-1214
<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/>